

日本ハリストス正教会の生き残り戦略

―神による〈記憶〉と死者儀礼をめぐる宗教学的的研究―

佐崎 愛（人間科学専攻 宗教学専攻分野）

本研究は、日本ハリストス正教会（以下、日本正教会）の死者への追悼実践を対象として、日本においてマイノリティ宗教である日本正教会が、マイノリティでありながらもどのようにして根付き、生き残ってきたのか、またそれを可能にした要因は何か、という問題を明らかにするものである。

すなわち、ロシアからの宣教師ニコライ（ニコライ・カサートキン）がやってきた1861年から現在までの、この約160年の間に、日本の正教徒は異文化として出会った正教会とどのように接触し（伝播の段階）、受け入れ（あるいは拒絶し）（拡大・縮小・相互影響の段階）、維持してきた（定常状態（維持・安定）の段階）ののだろうか。一方、司祭らはどのように信仰を伝道し（そのためにどのような創意工夫を行い）、信徒を獲得してきたのだろうか。また信徒たちは、どのように教えを受容し、時に信徒側からの要望を取り入れさせてきたのだろうか。特に、マイノリティ宗教でありながらも維持のあり方が「上手くいっている」と考えられる日本のハリストス正教会を対象としてこの問題に取り組むことで、日本正教会における「宗教の定着」のあり方およびそれが可能となった要因を検討する。

この問題を明らかにするために、本研究では三つの枠組みを導入している。

第一に、日本正教会が日本に伝道され、広まり根付く過程を、「宗教の定着」という概念を用いて捉えている点である。これまでの日本キリスト教研究は分厚いものがあるが、その多くは日本ではなぜキリスト教がマジョリティにならなかったのか、という視点からなされている。本研究ではこれを逆手にとり、日本正教会がマイノリティ宗教でありながらも今日まで信仰をどのように維持し、したたかに生き残ってきたのか、という視点から研究を行っている。

第二に、「宗教の定着」現象を、伝播した時期からある程度の時間的幅によって切り分けて捉える点にある。すなわち、宗教の伝播、拡大・縮小・相互影響、定常状態（維持・安定）という三つの状態に切り分けて分析を行う。特に、本研究ではマイノリティ宗教が拡大・縮小・衝突も含め相互に影響する段階、あるいは維持・安定しつつ信徒数に変化のない定常状態の段階に着目し、この時どのような戦略をもって日本正教会が日本社会に定着してきたかを明らかにする。

第三に、梅棹忠夫らによる「メーカー・ディーラー・ユーザーの論理」を援用し、捉える対象を単に「日本正教会」と大きくくくるのではなく、その中でも教会（教団）―司祭―信徒という三つの位相から捉える点にある。特に直接伝道を行い、信徒と教会をと繋ぎ時に関係を調節する「ディーラー」たる役割を持つ司祭と、日本で教えを実践しつつ信仰生活を送る「ユーザー」たる信徒の理解のあり方の違いや相互作用などについて、マクロに見ていくことで、現代の日本正教会の生きた信仰実践を多角的

に描き出すことを目指す（梅棹忠夫＋多田道太郎編 1972『日本文化と世界——論集・日本文化 2』）。

本研究の研究手法としては、基本的にはフィールドワークを用いており、中でも司祭や信徒を主たる対象としたインタビュー調査、儀礼への参与観察、正教会の出版物（特に信徒向けに作られた書籍、パンフレット、リーフレット、新聞、インターネットによる各教会の HP など）の質的分析を中心として行っている。それ以外に、質問紙によるアンケートも行うことで、マクロな視点を補っている。また日本の正教会の特徴や、正教会全体の聖伝（聖書・捧神礼（儀礼）・教義・聖師父・イコン・聖歌、その他すべて正教会として受け継いでいる正教会の教え）を明らかにするために、日本だけでなくロシアの正教会や修道院の出版物を参照するほか、筆者自身が伝教会やその他の教会イベント（バザーや親睦会など）に参加し得た知識も基としている。加えて、インタビュー調査、質問紙調査に関しては、東北大学文学研究科の倫理委員会を通して許可を得ている。

ここで、対象として扱うハリストス正教会の概要について先に簡単に言及しておきたい。ハリストス正教会（Orthodox Church）とは、「オーソドックス（正統派、正しい教え）」なキリスト教を意味し、ビザンツ帝国の国教として中近東、ギリシャ、東欧、ロシアなどを中心に発展してきたキリスト教の一派で、東方正教会、ギリシャ正教会などとも呼ばれる。本研究の主たる対象となるロシア由来の日本の正教会は、ロシア語のキリストを示すハリストスという語を用い、正式名称を「日本ハリストス正教会教団」という。日本正教会は国内を 3 教区に分け、現在日本全国に 64 教会（東日本主教教区 29 教会、東京主教教区 15 教会、西日本主教教区 20 教会）を有し、約一万人弱の信徒数が連綿と信仰を守っている（2020 年時点）（「2020 年度全国公会議事録」より）。正教徒は日々の生活の中で、毎週の聖体礼儀（日曜礼拝）や痛悔機密の他、各種の感謝祈禱^{モレューベシ}、埋葬式やパニヒダなどの祈りを暮らしの中で実践している。

以上を踏まえて、本研究の章立てを説明する。本研究の目次は以下の通りである。

目次

図・表・写真一覧

凡例

はしがき

序章 研究の目的と背景

0-1. 本論の視座

0-2. 研究の枠組み

0-2-1. 宗教の定着にまつわる術語の整理

0-2-2. 「宗教の定着」現象における三段階

0-2-3. 教会－司祭－信徒

0-3. 論文の構成

第1章 日本キリスト教研究の批判的検討

- 1-1. 現代日本のキリスト教研究史概観
- 1-2. 日本ハリストス正教会研究史
 - 1-2-1. 日本ハリストス正教会の研究史概観
 - 1-2-2. 日本ハリストス正教会の受容と定着に関する研究
- 1-3. 小括

第2章 日本ハリストス正教会の歴史的概要

- 2-1. 日本ハリストス正教会の概観
- 2-2. 亜使徒ニコライ時代：1861~1912 年
- 2-3. 宣教師セルギイ時代：1908~1945 年
- 2-4. 第二次世界大戦以後：1945 年~現在
 - 2-4-1. アメリカ人主教時代：1945~1970 年
 - 2-4-2. 日本人主教時代：1970 年~2021 年現在
- 2-5. 小括

第3章 日本ハリストス正教会の儀礼

- 3-1. 年中儀礼
- 3-2. 通過儀礼
- 3-3. 日本ハリストス正教会における日本独自の儀礼や実践
- 3-4. 〈供養〉儀礼への認識
- 3-5. キリスト教他教派の死者への追悼儀礼との比較
- 3-6. 小括

第4章 日本ハリストス正教会の死生観と神による〈記憶〉

- 4-1. 日本正教会の死生観
 - 4-1-1. 聖人伝に見る死生観
 - 4-1-2. 正教会の死生観
- 4-2. 神による〈記憶〉
 - 4-2-1. 〈記憶〉の由来とその意義
 - 4-2-2. 〈生者の記憶〉と〈死者の記憶〉
- 4-3. キリスト教他教派との比較
 - 4-3-1. 〈死者の記憶〉に関する比較
 - 4-3-2. 死生観の比較
- 4-4. 小括

第5章 新しい供養儀礼「月例パニヒダ」

- 5-1. 月例パニヒダの概要

- 5-1-1. 月例パニヒダとは
- 5-1-2. 月例パニヒダ開始の経緯とその後の展開
- 5-1-3. 月例パニヒダの分布と現状
- 5-1-4. 月例パニヒダの儀礼分析
- 5-1-5. 糖飯
- 5-2. 司祭と信徒のまなざし
- 5-3. 新たな儀礼創出のメカニズム
- 5-4. 小括

第6章 日本の正教徒宅に置かれる「モノ」

- 6-1. モノをめぐる議論
- 6-2. 正教徒の家庭祭壇
 - 6-2-1. 来日した宣教師の対応
 - 6-2-2. 聖像破壊論争
 - 6-2-3. ロシア正教徒の家庭祭壇
 - 6-2-4. 家庭祭壇の定義
- 6-3. 仙台ハリストス正教会の事例―信徒宅の家庭祭壇―
- 6-4. 中新田ハリストス正教会の事例：木製十字架①
- 6-5. 石巻正教会の事例：木製十字架②
- 6-6. 都市部と地方の家庭祭壇比較
 - 6-6-1. 家庭祭壇に置かれるモノ
 - 6-6-2. 日本の都市部と地方における家庭祭壇の比較
- 6-7. 小括

第7章 葬儀と墓地

- 7-1. 埋葬式から墓地まで
- 7-2. 墓地の形態
 - 7-2-1. 家墓・個人墓―仙台ハリストス正教会の事例―
 - 7-2-2. 教会墓地（共同墓地）―仙台・中新田ハリストス正教会の事例―
 - 7-2-3. 納骨堂―大坂ハリストス正教会の事例―
 - 7-2-4. 外国人墓地―函館ハリストス正教会の事例―
 - 7-2-5. その他
- 7-3. 日本正教徒の埋葬に関する苦難と葛藤
- 7-4. 土葬と火葬
- 7-5. 先祖としての「神の僕婢」へのプロセス
- 7-6. 小括

終章 日本ハリストス正教会の生き残り戦略

- 8-1. いかにして生き残ってきたか？
 - 8-1-1. 司祭の戦略

8-1-2. 信徒の要望

8-2. 何が日本正教会の生き残りを可能にしたのか？

8-3. 本研究の限界と今後の可能性

附録(1)日本ハリストス正教徒数の推移

附録(2) 日本ハリストス正教会の歴史年表

附録(3) 日本正教会の神品・教衆ほかの名称一覧

附録(4)アンケート調査①：質問紙とその結果（対象：日本全国の正教会）

附録(5) パニヒダ祈祷文

附録(6) 異教人のパニヒダ

附録(7) 埋葬式（お葬式の祈り）の祈祷文

謝辞

参考・引用文献

次に、各章を要約する。

本研究は二部構成となっている。すなわち、日本正教会の概観を示すⅠ部〈マクロな視点から見る日本ハリストス正教会〉（1章～4章）と、個別の信仰実践について記述したⅡ部〈ミクロな視点から見る日本ハリストス正教会〉（5章～7章）である。Ⅰ部では、これまで日本のキリスト教研究や日本の正教会研究をまとめ、日本正教会の歴史や儀礼、死生観について、マクロな視点から概観する。Ⅱ部では、現代の日本正教会でいま実際に行われている死者のための追悼儀礼やそれにまつわるモノなど、特に日本で新たに生まれた信仰実践をミクロな視点から個別に検討することで、現代の日本正教会の現状を明らかにするとともに、日本正教会がどのように日本に定着し、現在まで生き残っているのかを明らかにする。

序章 研究の目的と背景

まず序章では、本研究の問題意識、背景、使用する術語などを検討し、問いを焦点化するとともに、問いを明らかにするための三つの枠組みについて取り上げる。

0-1では、本研究の視座を明らかにした。本研究は、「日本社会においてマイノリティ宗教である日本正教会が、いかにして根付き、生き残ってきたのか、またいかなる要因がそれを可能にしたのか」を問題関心としている。その後、0-2では、この問題を明らかにするために、本研究で使用する三つの枠組みについて整理・説明した。すなわち、日本正教会が日本社会に根付いていく過程を「宗教の定着」という枠組みから捉え、また「宗教の定着」現象をその状態から、宗教の伝播の段階－拡大・縮小・相互影響の段階－定常状態（維持・安定）の段階という三つに切り分けた。そして、教会－司祭－信徒という三つの位相を設定し、中でも司祭と信徒の位相に着目することで、日本で新たに信仰実践が行われる時、司祭と信徒の理解のあり方の違いやそのせめぎ合いを多角的に描き出すことを目指す。最後に、0-3で論文全体の構成を明らか

にする。

第1章 日本キリスト教研究の批判的検討

本章では、これまでの宗教の受容・定着現象に関する研究を整理しまとめる。

まず 1-1 では、日本の事例を中心に、キリスト教受容・定着に関する研究史を概観した。これまでの日本のキリスト教受容研究は、本格的には 1960 年代から開始され、1980 年代までは「土着化」という術語を用いて形態を分類するものや、また日本のキリストの受容が「日本製キリスト教 Christianity Made in Japan」「キリスト教の日本的習俗化現象」として、キリスト教が日本文化に即した文脈に再解釈されているという研究がなされてきた（武田清子 1967『土着と背教—伝統的エトスとプロテスタント』；森岡清美 1970『日本の近代社会とキリスト教』,1972:52-57「外来宗教の土着化をめぐる概念的整理」『史潮』(109)；川又俊則 2000:25-48「キリスト教受容の現代的課題—死者儀礼、特に墓地を中心に—」『宗教研究』(326).；待井扶美子 2005『我が国クリスチアンの〈吊い〉にみるキリスト教の民間受容』（博士論文）；M.マリンズ 2005『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』）。しかし、実際に現代の日本正教会の信徒の信仰実践を見ると、日本人正教徒の半数以上は「家の宗教」として日本正教会を受け止めている。また信徒全て、あるいは司祭もが日本正教会の全てを「日本製のキリスト教」として受け止めているとは言い難く（むしろ「日本化」しつつあるキリスト教として捉えられている）、時と場合により、また司祭と信徒でも受け止め方が異なる。

また 1-2 では、日本正教会の研究史として、これまでの研究では明治期の日本正教会のあり方を歴史的アプローチから行うものが多く、それ以外は女性史、士族ハリストティアニン、アイコン、教会法上の立ち位置などから研究がなされてきた。その中で本研究は、現代の死者への追悼儀礼を対象として扱っている点に最大の特徴がある。従来の研究では、現代の日本正教会を対象にした実証研究はほとんどなされてない。また、従来日本正教会は死者儀礼に手厚いと考えられてきたが、死者への追悼実践について扱う研究も非常に少ない。本研究では、実践の中で信徒と司祭との駆け引きを描きから、現代の日本正教会における「生きた信仰」を捉え補う点から意義があると言える。

以上から本研究では、従来の研究にはない現代日本正教会の死者儀礼をめぐる実践を、正教会の重要概念〈記憶〉から分析し、司祭と信徒との創意工夫や相互作用を描き出すことで、これまでの研究を乗り越える。

第2章 日本ハリストス正教会の歴史的概要

本章は、特に日本ハリストス正教会に関する歴史的な流れをまとめている。

まず、2-1「日本ハリストス正教会の概観」を説明した後、日本ハリストス正教会の歴史を、宣教師ニコライが来日した 1861 年から現代までとし、この期間を四つに分けて検討している。すなわち、宣教師であったニコライが来日してから日本でハリストス正教会を意欲的に広めた 2-2「亜使徒ニコライ時代:1861~1912 年」、多くの困難や戦争に直面した宣教師ニコライの後継者である 2-3「府主教セルゲイ時代:1908~1945 年」、そして、2-4 第二次世界大戦以後の時代として 2-4-1「アメリカ人司教時代:1945~1970 年」、その後日本ハリストス正教会教団がロシアから聖自治教会として

独立し日本人司教がたった 2-4-2「日本人司教時代から現代：1970 年~現在」の四つである。

第 3 章 日本ハリストス正教会の儀礼

本章は、日本正教会の儀礼全般について紹介する。本研究では儀礼を、一年を通して行われる 3-1「年中儀礼」と、人が生まれてから死ぬまでに行われる 3-2「通過儀礼」に分け、それぞれ場合分けをして検討した上で、3-3「日本正教会における日本独自の儀礼や取り組み」について確認した。その後、日本正教会の死者のための祈りと日本の供養文化との交錯について 3-4「〈供養〉儀礼への認識」として説明し、その後 3-5「キリスト教他教派の死者への追悼儀礼との比較」を行うことで、日本正教会の特徴を浮き上がらせた。

特に 3-4 では、〈供養〉儀礼への認識と題して、日本正教会において死者のために祈る時に〈供養〉という語が用いられていることに着目し、日本文化における（特に日本仏教としての背景を持つ）「供養」の持つ意味合いをまず確認した。その上で、日本正教会の死者のために祈る際に祈られる〈死者の記憶〉と同様の意味合いで〈供養〉という術語が用いられていることを、信徒向けのリーフレットやブックレットを事例として示した。このことから、〈供養〉という語が正教会では正教会の文脈と矛盾することなく用いられており、また〈供養〉と〈記憶〉という術語がほぼ同じ意味で用いられていることを指摘した。また 3-5 では、カトリック、プロテスタントで行われている死者への追悼儀礼を分析した。この分析によって、カトリックと正教会が、死者のために追悼儀礼が行うのに比べ、プロテスタントはあくまで遺族や教会員など生者のために祈られていることが分かった。

本章は、日本正教会独自の死者への追悼儀礼の特徴を明らかにするために、日本正教会全体の儀礼、日本独自の儀礼、〈供養〉儀礼について考察し、次いでキリスト教他教派と死者への追悼儀礼の比較を行った。その結果、日本正教会では、〈死者の記憶〉が死者救済的側面を持つことから、正教会の〈供養〉＝〈死者の記憶〉として理解されており、その結果、信徒向けのパンフレットにごく自然に〈死者の記憶〉が死者の〈追悼供養〉と同義で説明されている。また、ロシア由来の正教会は、「日本の」正教会となるために多くの日本文化に根付いた儀礼を取り入れてきたが、日本独自の儀礼の中でも、特に死者儀礼に注力していたことが明らかとなった。

第 4 章 日本ハリストス正教会の死生観と神による〈記憶〉

本章は、日本正教会の死生観と正教会の重要概念である〈記憶〉をまとめた。

まず、4-1 では、日本正教会の死生観として、聖人伝（ダニイロフ修道院 2002『人の死後について』）における死後の世界、そして正教会の公式見解として死後の世界を示した。聖人伝によると、正教徒が永眠する（亡くなる）と、守護天使と悪魔天使がやってきて、20 の関所を越えることとなり、これら全てを越えると天国に行けるといふ。しかし、正教会の公式見解としては、死後の世界は「死んでいないためわからない」ものであり、具体的な描写はなされないし語られない。聖人伝は聖人のひとつのビジョンに過ぎないと考えられている。

4-2 では、死者への祈りだけでなく全ての正教会の奉神礼の中で重要な概念〈記憶〉の持つ意味と意義、由来などについて紹介する。この〈記憶〉とは、神による神の〈記憶〉を指しており、〈生者の記憶〉と〈死者の記憶〉に分類することができる。〈記憶〉を祈ることは、①最も信徒の人格・徳を高める行為、②他者に代わって自分が祈ることで（他者の）神恩・幸福・健康を賜うよう祈る行為、③生前の罪の赦しを願い死者が諸聖人のいる神の福楽の世界に入るよう祈る行為、④同時に自分が故人の信仰を受け継ぎ将来神の国に入ることができるよう祈る行為を指す。このうち、特に②が持つ死者救済的な要素と日本の仏教文化における供養の概念の類似から、〈記憶〉（中でも〈死者の記憶〉）が、重ね合わせて理解され取り入れられることで、ロシア由来の異文化であるハリストス正教会が「日本の正教会」として定着するよう図っている。

4-3 では、他のキリスト教諸派、特にカトリックやプロテスタントを比較対象に据え、正教会における〈死者の記憶〉に類する言葉の比較、死生観の比較を行いながら日本正教会の死生観の特徴を明らかにした。これによって、カトリック・プロテスタントにおいても〈記憶〉に類似する語彙（「追憶」「顧みる」「記念」）は死者儀礼の中で使用されているが、日本正教会〈記憶〉のように、日本仏教の供養概念とすり合わせ、取り入れることはなされていない。日本仏教における供養は家制度と密接に関係していることから、日本正教会の〈記憶〉は、正教会が「家の宗教」化する要因の一端を担っていると考えられる。

第5章 新しい供養儀礼「月例パニヒダ」

第1章から第4章まで、第I部として日本正教会の概要を見てきたが、第5章以降（第7章まで）は、第II部として個別の事例を検討する。

さて本章は、文字通り日本正教会独自かつ、近年一部の地域で実施されている月例パニヒダという儀礼について検討している。そもそもパニヒダ ПАНИХИДАは、その語源をギリシャ語「παννυχίς」に持ち、「パン πας（すべて）」「ニクス νύξ（夜）」「オード／アド αδω（歌う）」という3つの言葉の合成であり、「永眠者のために夜を徹して歌う」つまり「徹夜の祈り」という意味で、埋葬式の前夜に行われる通夜的儀礼である。このパニヒダを基に日本で作り出され、現在も日本でのみ行われる死者追悼儀礼が月例パニヒダであり、毎月一度、聖体礼儀（日曜礼拝）の後に、その月の永眠者（死者）の名前を呼びながら祈るパニヒダ儀礼である。起こりは1970年代東京復活大聖堂における婦人会を中心としたメンバーの希望によって不定期に行われていたものが、1985年以降日本全国の正教会に広がったものである。しかし全国的な規模で見ると、月例パニヒダは全体の約4割の教会でしか実施されていない（5-1）。

月例パニヒダは、死者（多くは各人の先祖）個人の聖名を何度も読み上げるところ、そして「月命日」のように行うことから、通過儀礼と年中儀礼の中間的儀礼として機能しているところに、その最大の特徴がある。実際、日本仏教の年忌法要と正教会の年祭を比較すると、1年目まではその催事の行われる間隔が似通っている。このことから、月例パニヒダは、年季法要で言うところの一周忌以降、弔い上げまでの儀礼の代わりをなしているとみなすことができる。また、この月例パニヒダは、信徒にとって亡くなった家族や身近な人の名前が読まれる点に意味があり、一方教会にとっては

信徒が教会に来る回数を増やすためのきっかけとみなされている（そしてこの目論見は実際成功している）（5-2,5-3）。このように、月例パニヒダは信徒の要望から始まり、司祭と信徒両者の要望を満たす儀礼として誕生し、また日本に正教会が定着するための一端を担っていると考えられる。また、広まった時期が 1985-2000 年代であることから、ちょうど一時的な維持・安定（定常状態）を得た後に起こった拡大・縮小・相互影響の段階の現象であることがわかる。

第 6 章 日本の正教徒宅に置かれる「モノ」

日本の正教徒の家庭祭壇にはたくさんのアイコンが置かれ、それと同時にそれ以外のモノが置かれる。正教徒らは家庭祭壇で祈ることで個々の信仰を深めるのと同時に、先祖への追悼も行っている。本章では、主に信徒の家庭での祈りの際に用いられる、家庭祭壇、そして中でも位牌代わりに用いられる「木製十字架」を事例として紹介する。対象は、仙台正教会、中新田正教会、石巻正教会（を中心に、補足として大阪正教会、神戸正教会、ロシア正教会（モスクワ））の正教徒宅の家庭祭壇およびそこに置かれるモノである。

6-1 では、宗教的場面で用いられるモノに関する先行研究、およびクリスチャンの家庭における家庭祭壇に関する先行研究をまとめている。6-2 では、明治期にやってきたニコライが日本人宅の仏壇を「神壇」という名称でアイコンを置く場として使用しようと思っていたことや、聖像破壊論争によってアイコンが「神様をみるための窓」として受け入れられてきたことから、正教徒にとってアイコンを置く場の家庭祭壇も偶像崇拝にあたらないことなどを示した。また正教徒における家庭祭壇は、東の隅に、清潔な布の上にアイコンを置く場として作られたものであり、ロシア正教会はもちろん日本正教会も家庭に設置することを推奨している。

家庭祭壇を都市部と地方で比較するために、6-3～6-5 では、仙台正教会、中新田正教会、石巻正教会の家庭祭壇の事例を取り上げた。これを受けて 6-6 では、都市部と地方の各家庭祭壇上に置かれるモノを分類・比較した。すなわち、①正教会推奨のモノ、②①以外の正教会に関するモノ、③キリスト教以外の文脈で用いられるモノ、④それ以外、の 4 つに分類した。その結果、都市部の正教会では正教会推奨のモノで構成されることが多く、一方地方では、①の他に②、③、④のモノも多く置かれていた。地方では特に、②の事例として、日本の仏教文化的な線香やおりんなどのモノが家庭祭壇に取り入れられていた。また、③の事例として中新田や石巻には、「位牌の代わり」の木製十字架があった。これらは、正教会の文脈に読み替えられていたり、そのまま非正教徒が使用することが想定されていたり、あるいは完全に正教会風に作り換えられたものである。

結果、地方の家庭祭壇は都市部に比べて、木製十字架などを含むより多くのモノが置かれる傾向にある。その理由は、都市部では自分や家族のみが家庭祭壇を見ることが想定される一方、地方では他に友人、親戚、近所の人などの他者の存在が意識されており、この家庭祭壇を「見る（と想定される）者」の差異によって置かれるモノの量が変わるからである。このことから、家庭祭壇上に置かれるモノはエージェンシーを発揮し、自分と他者とを相互に関係づける機能を持っていると考えられる。家庭

祭壇は、他者の眼があるときほどモノが求められ、結果家と地域が密着に関係している地方ほど、家庭祭壇上のモノは多くなる。また木製十字架のような他者（非正教徒）の影響を受けてつくられたモノが家庭祭壇に置かれることで、非正教会的な信徒がマジョリティである地域においても、したたかに生き残り、正教会の定着を助けている。

第7章 葬儀と墓地

本章は、信徒や司祭の埋葬（土葬・火葬を含む）および墓地への関わり方について考察する。

7-1 では主に人の永眠（死）から墓に入るまでに行われる儀礼を中心にまとめた。正教徒は永眠する直前に痛悔機密・領聖を受け、永眠後 2～3 日以内にパニヒダ、その後埋葬式を行い、火葬あるいは土葬される。7-2 では、日本正教会信徒の家墓・夫婦墓・個人墓、教会墓地、納骨堂、外国人墓地、その他（寺社墓地内の墓地、市民墓地、土葬）について、それぞれどのような形態か具体的に確認した。7-3 では、日本正教徒の埋葬に関する苦悩と葛藤と題して、明治期の自葬の禁令が出ていた期間（1872 年から 1884 年まで）埋葬、墓地をめぐる、社会や寺社との対決を余儀なくされた事例（通称埋葬事件）を紹介した。

7-4 では、土葬と火葬と題し、本来土葬文化圏で展開した正教会が、長い時を経て今現在日本で火葬される時、これがどのように受け止められているのか、また司祭はこのことをどのように説明しているのかについて明らかにした。司祭によると、日本に定着した後も土葬されていたが、1950 年以降火葬率が上昇して日本社会において火葬が一般的になると、日本正教徒も火葬を受け入れていった。この時、日本人正教徒にとって火葬はすでに「日本の文化」として理解しており、この点に違和感を持たない信徒の方が多いというのが現状であった。また、キリスト者と火葬に際して問題となる死後の復活時の身体の問題に関しても、最初の人間アダムが土で作られたことから、例え火葬を行っても最後の審判の際にその身体は巡り巡ってもう一度結合すると考えられ、火葬によって信仰の裏切りはないと考えられている。

7-5 では、特に納骨堂の〈永代供養〉の事例を用いて、日本正教会において、永眠（死）した正教徒がいかにして先祖となるのかを、吊い上げを参考に考察した。正教徒が先祖となるプロセスとしては、最初、「私のおばあちゃんの〇〇」のように個性のある永眠者が、通過儀礼→中間的儀礼（月例パニヒダ）→年中儀礼（墓地祈祷）と死者儀礼を行い、最後名前も知らない「先祖」（神の僕婢）となる。この間、死者儀礼として〈死者の記憶〉を祈る際に名前（聖名）を呼ぶその回数は減少していき、最後は「神の僕婢」という言葉に統合され名前が呼ばれなくなる。〈永代供養〉は、さらに年中儀礼と「先祖」の間の儀礼として考えられる。日本正教会は、この個性的死者から非個性的死者への移行期間の儀礼として、新たに月例パニヒダや〈永代供養〉のような日本独自の儀礼を創出した。

このことから、二つのことが分かる。一つは、日本正教会が日本に定着する上で、日本の供養文化をうまく取り込み、先祖への追悼を可能にしたことで、日本正教徒の「家の宗教」化が行われた。二つめとして、近年の傾向として子供に墓を無理に継がせない永代供養のニーズが高まっているが、これを日本正教会はしたたかに取り入れ

ることで、特に年配の信徒に安心を与えつつ新たな信徒の獲得を行っている。

終章 日本ハリストス正教会の生き残り戦略

本章では、タイトルと同様「日本ハリストス正教会の生き残り戦略」と題し、これまで検討を行ってきた日本正教会の事例を、「宗教の定着」現象に当てはめてまとめ、問題の視座で挙げた問いに回答する形で総括する。

まず 8-1 では、いかに日本正教会が生き残ったのかについて、「司祭の戦略」として教会・教団を運営する「ディーラー」としての司祭の伝道・教団維持のあり方から日本正教会の生き残り戦略を検討し、その後「信徒の要望」として、これまでの信徒の要望のあり方を検討し、宗教の定着の際に、信徒の要望がいかに作用してきたのか検討する。

8-2 では、日本正教会の生き残りを可能にした要素について、以下三点にまとめた。

第一に、「家の宗教」化がある。日本人正教徒の多くは家の宗教として正教会の信仰を受け継いでいる。これは、日本正教会が死者、特に先祖への祈りを可能にし、次いでそれを〈供養〉と〈死者の記憶〉を重ねて理解することで、日本の供養文化とリンクさせ取り込んだことが大きいと考えられる。その結果として、名前を憶えているような身近で「個性的な死者」から直接会ったことのない「非個性的な死者（名前も知らない先祖）」へと移行する吊り上げのようなプロセスが確立され、この間の儀礼として月例パニヒダや〈永代供養〉が生み出された。

第二に、既存の信徒への手厚い配慮がある。例えば、正教徒は、亡くなった母親が非正教徒であっても、正教会の儀礼として異教人パニヒダ（非正教徒のためのパニヒダ）を行うことができる。また死因が自殺（の正教徒）の場合でも、例えば心の病気と判断できる場合（かつ生前無神論者でない場合）は、病によって亡くなったと判断し埋葬祈祷を行うことができる。あるいは位牌のようなものが欲しいという信徒の要望には、「位牌の代わり」としての木製十字架によって対応している。このように司祭はケースバイケースで柔軟に対応し、特に既存の信徒を失わないよう配慮している。これは日本の正教会が仏教等に比べてマイノリティであるための司祭の工夫の一つと見ることが可能だろう。

最後に、他宗教やその信徒と「うまくやる」よう、したたかに対応・工夫していることが挙げられる。例えば曹洞宗の信徒が多い中新田地区では、仏教徒の「位牌もないのか」という言葉から、位牌替わりの木製十字架が生み出されている。また家庭祭壇におりんや線香を、非正教徒が家を訪ねた時のために用意している信徒もいる。この他に、寺の敷地内に正教徒の墓を現在も持つ家があり、また地域ごとの埋葬の決まり（例えば野辺送り、火葬など）も柔軟に取り入れ対応している。このように、時に正教会から見て異教的な他の宗教やその信徒あるは地域の習慣習俗とも、うまく関係を作ることによって地域に溶け込みつつ、時に正教会の信仰生活に援用が可能な要素をしたたかに取り入れることで、日本正教会はマイノリティ宗教のまま、日本に根付き定着している。

最後に、8-3 で本研究の可能性と課題について示した。